

財団だより

# 多摩川

1989. 9 第43号



ヨモギハムシ (ハムシ科)  
ヨモギの葉を食う。体は黒色、  
体長7～9mm。



自然観察を楽しむ人が通る川原の道 (多摩川原橋付近)

## 多摩川風物誌

### (14) 秋の風物・鳴く虫を聞く～河川環境学習の中で～

— 前 略 —

#### ●研究の目的

都心にしても郊外にしても、そこにある生物は人間も含めて環境の一部になって無機的環境と影響しあっている。

多摩川原流域の動植物の種類や量もまた、川の水による無機的環境の影響を受けていると思われる。

児童はある一時点の生物を単独にしかも断続的に見ることはしても、環境とのかかわりで見える見方は、不得手のようである。また、実験室内で実験をする機会はあるけれども、野外に出てそこに自然を対象に活動する機会は、きわめて少ない。

したがって、生物のいきざまをありのままに見て、生物独特の種族維持がいかに行なわれているかに感動する体験も乏しいといわざるを得ない。

そこで、多摩川原流域の川原に生きる動植物に環境の影響がどのように現われているかなどの実態を調べ、環境学習への導入の可能性をさぐり、多摩川流域の環境保護に関心を高められるような児童がとり組む課題を作成をしたいと考える。

#### 調査結果

##### ①季節をとらえる手がかり

児童・教員が各季節をとらえる手がかりを整理すると、動物、植物、環境(動植物を除く自然の現象など)、生活・行事の4項目に分けられる。

ここでは、特徴的なもののいくつか列記してみると次の通りである。

- 《春》・チョウ(が飛ぶ)、オタマジャクシ、虫、メダカ、小鳥の声
- ・サクラ、タンポポ、ツクシ、花、ナノハナ
- ・雪どけ、春一番、暖かい日、春風、陽ざし
- ・入学式、春休み、花見、新学期、小運動会
- 《夏》・セミ、カ、カブトムシ、クワガタ、昆虫
- ・ヒマワリ、アサガオ、みどり色の葉、スイカ、葉が多くなる
- ・暑い、太陽、入道雲、日が長い、水の暖かさ
- ・プール、クーラ、アイスクリーム、ビール、夏休み
- 《秋》・スズムシ、コオロギ、アカトンボ、虫の声、冬眠の準備
- ・落葉、モミジ、キク、カキ、紅葉
- ・台風、十五夜、涼しい、青い空、つめたい風
- ・運動会、たき火、食欲、遠足、やきいも
- 《冬》・冬眠、冬鳥、サナギ、虫がいなくなる、カモ
- ・枯木、枯葉、落ち葉、枯れた芝生、枯枝
- ・雪、氷、寒い、北風、霜柱
- ・クリスマス、こたつ(ストーブ)、スキー(スケート)、雪だるま、お年玉

「多摩川流域の生物と環境に関する学習の基礎的研究」

1985年 栗田敦子

(財)とうきゅう環境浄化財団(一般)研究助成

No26-2 より部分掲載

※住民による「鳴く虫を聞く会」は毎年9月多摩川の自然を守る会(連絡先0426-36-0902柴田方)で行われています。また、鳴く虫の研究者であった故松浦一郎氏が「鳴く虫の博物誌」(文一総合出版)を出版されています。

## 多摩川散歩

### ●大丸用水を訪ねて

稲城市教育委員会市史編纂室 沢 久 枝

南武線、南多摩駅を出てすぐ右に折れ、線路を渡ると小さな橋が架っている。幅3.4m程のこの流れが大丸用水である。江戸時代の初めから大丸村をはじめ、長沼、押立、矢野口の稲城の村々、菅、中野島、上菅生、五反田、登戸など川崎の村々の水田を潤してきた用水である。

橋の左手、用水の上を谷戸川が横切っている。川の立体交差である。橋の側面に「大丸用水潜水樋門、大正十五年成」と刻まれている。こゝが明治二年の「大丸村明細帳」に御普請場として、元塚樋（取水口）、分量樋とともに記されている伏越樋のあった所である。

橋を渡りすぐ左手の谷戸川を越え、右に曲り、谷戸川に沿って少し歩くと府中街道に出る。すぐ左手が是政橋で、こゝから多摩川の堤防を上流へ15分程の所に、大丸用水の取入口がある。江戸時代、たびたびの出水に破損し、幕府へ御普請を願い出、明治以後も修理・改築をくり返してきた。現在のものは昭和34年に東京都が作ったものである。

取水口と是政橋の中間に、南武線と武蔵野南線の鉄橋が並んでいる。このあたり多摩川の中流域は大正末から昭和30年代にかけて、盛んに砂利を採取した所である。採掘により南武線の橋脚のコンクリートの基盤が、水面上にむき出しになり、釣人の格好の足場となっている。新しい武蔵野南線の橋脚と並んで、ちょっとおもしろい眺めである。

是政橋から今来た道を引き返し、5分程歩くと分量橋である。橋の右手で用水が二つに分れている。分量樋の跡である。橋の名前もこゝから名付けられた。右側の細い流れが大丸村用、左側の太い方は他村用で、長沼、押立へと枝分れしながら東流し、川崎市菅で三沢川に流れ込み、多摩川に注いでいる。

分量橋に戻り、南武線の踏切りを越えると川崎街道に出る。横切った右手に大丸用水の細い流れが現れ、静かな住宅地を丘陵の裾に向っている。流れは意外に豊かで、右側の板塀の下にかつての洗い場の跡が残っている。用水に沿って5分程行くと円照寺の横に出る。このあたりは大丸村の高札場のあった所で、村の中心であった。

円照寺は臨済宗建長寺派で、本尊の十一面観音は法衣垂下の様式をもつ室町時代の作である。境内の池は民話「舌を抜かれたお獅子」の池で、20年程前までは豊かな水をたたえ、大丸用水に注いでいたといわれる。かつて大丸用水の水で潤っていた水田は宅地化し、わずかに残る稲田に昔の面影を偲ぶのみである。

ここから京王相模原線の稲城駅まで20分あまり、駅の東西に都重文の阿弥陀三尊を祀る常楽寺、蛇より行事で有名な妙見寺がある。ともに駅から10分程の距離である。稲城駅から一駅の京王読売ランド駅の近くに、梅の名所の妙覚寺、新東京百景の一つ弁天洞窟のある威光寺、穴沢天神がある。全部歩いて一日の散歩コースである。





#### 下水文化研究会代表 稲場紀久雄

私は、3年前に友人達と『下水文化研究会』というサークルを作りました。古来、水を大切に使うために、水を汚さないために様々な工夫が払われてきました。しかし、それらの工夫は、文化と意識されず、現代文明の前にとましいことであるかのように捨てられ、あるいはまさに捨てられようとしています。研究会の最初の目標は、これらの工夫を発掘し体系化することでした。私は、この調査のフィールドを多摩川に決めました。

私達は、手分けをしてこの2年間、源流地域の集落から最下流の市街地まで頻繁に歩き回り、土地の古老から話を聞きました。私達は、多摩川に繰り広げられてきた生活の実像に接すると同時に、今はともかく昔は汚水が多摩川に殆ど流されなかったことを実証しました。この調査を経験してからの私は、多摩川を以前と少し違った目で見るような気がします。

笠取山の山頂直下の水干に設けられた水神様の石祠から見渡した多摩川の景色は、まさに悠揚たるものでありました。石祠から50メートルばかり下った所に大岩があって、その下から多摩川最初の水が流れ出していました。そこでは、多摩川は、大きい抱擁力で人間の生活のすべてを受け入れているようでした。

しかし、現実には厳しく、源流地域の一之瀬高橋は、過疎の集落で、残った戸数もかなりの早さで減りつつありました。丹波山村も小菅村も懸命の努力を傾けて、村の維持を図っています。これらの地域

の人々は、全部合わせても三千人にも達しません。が、源流地域を生活の場として守っているのです。

私は、多摩川は現在三つの違った川が繋がった川になってしまっており、昔の多摩川は小河内ダム上流、山梨県側にその姿を止めるのみであると考えています。その最後に残った多摩川もまさに危機に瀕しているように思えてなりません。

東京都は、奥多摩町や桧原村の振興についてはそれなりに検討しているようですが、実は源流地域は、その奥の山梨県側の地域と一体の共同体をなしているのです。共同体が二分されている所にまず問題があります。

その上、源流地域から多摩川を考えますと、下流地域の人々の生活が多摩川への帰属意識を喪失したものになっていることがよくわかります。ヤマメやイワナ、それに山葵や山菜、いろいろな特産物がありますが、それらの物産は市場に流通すると数ある商品の一つでしかありません。物産は、横には広く流れますが、川の上下流、つまり縦には流れなくなっているのが一般のようです。人の流れも同じです。私は、多摩川源流は都会の子供達への環境教育のセンターとなってほしいと願っています。そうなれば、子供達の心が多摩川への帰属意識が芽生え、多摩川の問題を自分の問題と考えるようになるに違いありません。

これからは多摩川への帰属意識の回復という観点から自分達の生活を多摩川の方に当てはめてみることも大切だと思います。心の通った生活と密着した地道な対策、それこそ多摩川が今望んでいるものではないか、私はそのように考えています。

よみがえ

## 甦れ！ 多摩川

多摩川紀行

山道省三

## ② 奥多摩湖～氷川（JR奥多摩駅）

前号のこの項で、多摩川河口の羽田から丸子橋（大田区田園調布）まで、上げ潮にのってカヌーで多摩川を遡った。水面から見た多摩川の姿は、普段見る川岸からのそれとは異なり、自然景観や生物相の豊かさ、土木構造物や市街化の状況など、今までとは違う経験であった。

そこで、今回から4～5回に分け、奥多摩からカヌーに乗って川を下りながら、多摩川の様子をレポートすることにした。

8月26日(土)。折りからの台風の影響で雨。都心は薄雲りだったが、奥多摩の駅からバスで奥多摩湖に向う途中から雨がぱらつき始める。湖に着くと余水吐（湖の水位が一定より高くなると下流へ放流するための堰）から大きな滝となって水が流されていた。この余水吐からの放流は、毎夏7月21日から8月31日まで毎秒1.5tが放流されていて、その主な目的は、夏季の奥多摩渓谷の水質、水温改善のためとされている。以前は、湖の深い所から水が放流されていたため水温が低く、夏場、鳩ノ巣や御岳といった古くからの行楽地で水遊びができなくなったことや、アユの生育が悪くなることがあって、このところ湖の表面の水を流すように改善されてきた。この結果、平均4～5℃の水温の上昇（青梅市内）がみられるようになった。このほかに奥多摩湖からは毎秒7.78tの発電用水の放流がありこれらが上流域の水量の大半を維持してきた。

さて、奥多摩湖からのカヌー下りは結果的にはさんざんな目にあってしまった。というのも、湖のダム直下から約2kmは入り組んだ岩場と急瀬の為、とてもカヌー下りができそうもなく、適当なポイントを捜しながら、26キロの折りたたみ式のカヌーを背負って、旧青梅街道を歩いてみた。旧青梅街道は、現在の新道から川寄り一段低い所を歩いて、ダム直下から左岸沿いを檜村橋爪詰まで約6kmが残っている。幅2～3mの狭い道で一部舗装されているものの大半は裸道である。その途中には、2～10軒程のいくつかの集落が急斜面にへばりつくように残っていて、自動車道で新道ばかりを通っている人には思いもかけない光景に

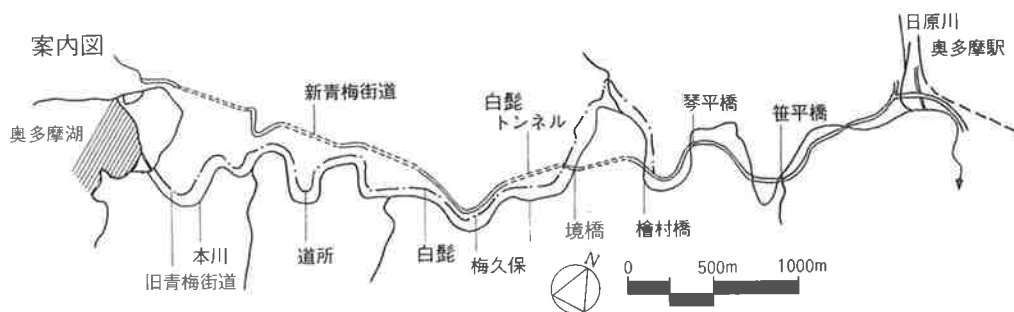
出会う。その中のひとつ梅久保の集落から沢に下る。道らしい道はほとんどなく、45度ぐらいの急斜面にわずかな畑が拓かれ、地元の老婆から下り口を聞いてやっと川面にたどりついた。幸い淵とカヌーを組み立てることができる岩場があって、そこで準備を整えてそっと水面におろしてみ。カヌーは、セピラーという空気を入れる構造のもので、ツーリング用である。胴体部と艇底に分けて空気を入れるので、岩にぶつかってもクッションとなって衝撃が少ないこと、一ヶ所が空気もれしても他に波及しない三層になっているため沈没する可能性は少ない。しかし、ヘルメット、ライフジャケット、ウェットスーツ、溪流釣り用の地下タビといういでたちで出発した。思いもかけない流量の多さと流速のため軽いカヌーはすぐ流心に乗れたものの、約200m下った所で急瀬に出会う。この急瀬に入る前に岸にカヌーをとめ沢の岩場に登って下れるかどうか様子を見てみた。ところが、この瀬は大きな岩が入り組んでいて約50mに渡って小さな滝の連続となっていた。こういう場合、川岸をカヌーを引きながらクリアするのであるが、切り立った急崖の下では歩くスペースが全く見当たらない。かといって、旧道まで登る道もない。この時点で全く立ち往生してしまった。雨と水面からのモヤで薄暗い谷底でしばらく思索した結果、カヌーを組み立てた場所まで引きかえすことにした。しかしこれとて容易ではなく、わずか4～5分で下った所を一時間もかかる始末であった。

当初めざしたダム直下から奥多摩駅のある氷川までは何の障害もなければ約1時間で下れるが、事前にかくつか情報を集めたり、以前、旧道からかい間見た様子からして穏やかな川底を想定していたが、水量の多い奥多摩の渓谷はとても荒々しい、人を寄せつけない生きた川であった。

重い荷物を背負ってやっと旧道までたどりつき、下流へ向って歩きながら再度トライする場所を捜したが、とうとう檜村橋まで旧道を歩く結果となってしまった。

今回は、奥多摩湖から奥多摩駅までの約11kmをカヌー行ならぬ徒歩で下ることになったが、樹間から響く瀬音や深く急な谷底の荒々しい様子は、中・下流の多摩川とは全く異なる多摩川の自然ならぬ野生の姿であった。

9月、余水放流が終った段階で再度トライしてみたい。



## 財 団 から の お 知 ら せ

### 〈研究助成報告書完成〉

助成集報（第16巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

#### 助成集報第16巻

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
● 多摩川源流域の森林立地に関する地形・地質学的研究	小 泉 武 栄	東京学芸大学地理学教室 助教授
● 多摩川底泥構成物質の毒性学的研究〔Ⅱ〕 —底泥抽出物のマウスに対する毒性—	高 橋 省	都立衛生研究所研究員
● 護岸が流れに及ぼす効果およびアユの生育場との 関連について	玉 井 信 行	東京大学工学部土木工学 科教授
● 大気降下物（降水・ドライフォールアウト）によ る多摩川流域への汚染物質負荷の評価	小 倉 紀 雄	東京農工大学農学部教授
● 多摩川水系の変異原生調査	浦 野 紘 平	横浜国立大学工学部助教授
● 多摩川の水および底質における有機塩素化合物の 分布 —多摩川河川水の塩素処理による有機ハロゲン化 化合物の生成とその前駆物質に関する研究—	鈴 木 静 夫	東京理科大学薬学部教授
● 多摩川流域における二次林の動態とその維持管理 に関する研究	濱 谷 稔 夫	東京大学農学部教授
● 多摩川河川敷におけるイタチの生息状況の把握な らびに行動圏の調査 —ラジオテレメトリー法による—	東 英 生	野生動物保護管理事務所 代表

### 〈第一次研究助成選考結果〉

前号で平成元年度（第一次）研究課題の選考結果をご紹介致しましたが、下記研究課題1件（A類）が追加採用されました。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
(A類研究)		
● 明治・大正期における多摩川流域の水車分布 —水車台帳の作成と水車諸産業の存在形態—	鈴 木 芳 行	国税庁税務大学校資料室 研究調査員

## 第3回多摩川週間に協賛して

多摩川週間が、7月18日から今年も行われ、財団は協賛者として協力した。その中のイベントの一つ、多摩川シンポジウム、テーマ「遊び空間としての多摩川—新多摩川事情—」は、7月20日多摩市公民館ホール、定員543名を100名程超す盛況さであった。主催は多摩川流域協議会で、建設省関東地方建設局が中心になり多摩川流域の東京都、神奈川県、山梨県外市町村の自治体全部で構成されている。

基調講演は文化人類学者、東京外国語大学教授・山口昌男さん、「多摩川をめぐる知的散歩」を約一時間話され、パネルディスカッションに移った。コーディネーターは、俳優渡辺文雄さん。パネラーは四人で、環境デザイナー漆原美代子さん。テレビでお馴染みのフォークグループ「あのねのね」タレント清水国明さん、(芸能活動のかたわら、「アウトドアへの優れたトランスポーター」でオートバイの魅力にとりつかれ、日本最大の「国武舞レーシングチーム」を結成、またアウトドアライフ拠点でもある「国武舞村」の村づくりを全国的に展開しているアウトドアライフ人間でもある)。都市計画家であり歌手でもある・菅原やすのりさん(大自然を愛し世界を舞台に歌い続けるかたわら、都市計画家としても第一線で活躍中)。そして、河川工学の専門家、関東学院大学教授・宮村忠さんで、今まで行なわれた、多摩川環境シンポジウムのメンバーと些か異なり、テーマ「新多摩川事情」にふさわしい、やりとりが活発に行われた。

冒頭、コーディネーター渡辺文雄氏は、私は川について全くの素人です。しかしそろそろ素人の出番の 때가、川にも来たように思うとの発言。パネラー・菅原やすのりさんは、私は最近多摩川で泳いでみた。上ずみの水はきれいにみえたが、川底

のよごれが体につき閉口した。それでも川がきれいになってから遊ぶのではなく、川で遊びながら川をきれいにすることを考えるべきだと主張は「横浜川を考える会」の活動理念とあい通ずるものがあるように思えた。

衣食足りて礼節を知る今、私達は余暇をいかに過ごしたらよいか考える余裕が出てきた。これを市民の生活文化の形成と考えるとすれば、芸術や趣味の分野では、各所に美術館やコンサートホールといった文化施設は整備されて来たものの、自然環境を基盤とする同様のものは、まだまだ未整備である。とくに、川や湖、海浜といった水辺を活用した環境整備は、これからの課題である。

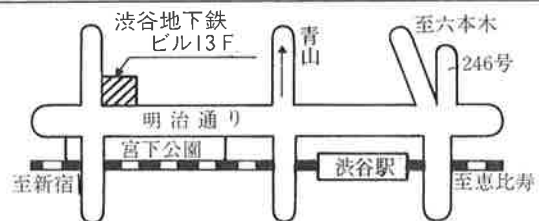
自然環境の活用は、片やリゾート地としての視点から大きな動きが見られるが、従来のリゾートというワクにとらわれず、高齢化社会の到来や健康、教育といった幅広い観点に立った上での生活文化を形成する場として捉えていくべきだろう。

今回のシンポジウムのテーマが「遊び空間としての多摩川」であったことの意義は、河川空間を新たな生活空間(文化空間)として考え直してみたことと、すでに河川管理者や関連団体のみのテーマにあらず、あらゆる行政機関や団体、市民に関連するテーマであることにあったのではなかろうか。今後、行政のワクや活動分野にとらわれることなく、各所で川と生活文化との関わりが議論されることを望みたい。

今回の主催、多摩川流域協議会のご努力に敬意を表するとともに、多摩川週間を実り多きものにするための、一層のご活躍を期待してやまない。

(常務理事 赤羽 厚)

- 発行日 平成元年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (048)831-8125